



327

948

養蠶家の訓練



始





山田伊三郎著



養蠶家の訓練



327-948



# 養蠶家の訓練目次

## 第一章 緒言

農業上に於ける蠶業の地位……農は國の本……副業として  
蠶業の必要なる所以……皇室の厚き御奨勵

## 第二章 養蠶家訓練の必要

蠶業は覆業となり易し……副業となすには養蠶の秘訣を知る  
を要す……養蠶家の病……現代養蠶家の急務は訓練にあり

## 第三章 養蠶家訓練の要項

一、勤儉……

目次  
勤儉の誤解……大黒天の教訓……怠惰に流れ易し……

大正  
6. 3. 30  
内交



金錢を浪費し易し

一、學理を應用すること……………三二  
 學理を無視するものは骨折損の草臥儲け……………蠶糞の不  
 始末に依る損失數百萬圓……………婦人知識の程度を高むべし

三、協同……………二六  
 養蠶家共同の利益……………蠶種の高價なる所以……………共同販  
 賣の利益……………三業者提携の必要

四、經營法の改善……………三三  
 山師的經營を排す……………横の擴張よりは縦の擴張……………事  
 業の計畫を樹てること

五、經濟的思想の養成……………三八  
 養蠶失敗の原因……………一文惜みの百知らず……………虛榮心に  
 驅られ易し

六、獨立心の養成……………四三

依頼心は養蠶に大敵……………自負心……………迷信を打破すべし

第四章 訓練の方法……………四九

一、訓練の手段……………四九  
 耳よりする方法……………目よりする方法……………實行する方法

二、訓練の機關……………五五  
 町村當局者……………養蠶組合……………養蠶教師……………小學校……………有力者

第五章 結論……………六四

百の理論より一の實行……………六四

養蠶家の訓練目次終



### 農家五訓

農學博士 横井時敬

- 一、家を富ますは國家の爲と心得奢侈を戒め勤儉の心掛肝要の事
- 一、家の富は事業の改良に基くこと多きものなれば學理を應用する心掛肝要の事
- 一、家の幸福は社界の賜なれば公共の爲には應分の勤勞を盡くし公德を修むる心掛肝要の事
- 一、共同戮力は最も大切の事なれば小異を捨て大同に合し個人と共に公共の利益を進むる心掛肝要の事
- 一、農民たる者は國民の模範的階級たるべきものと心得武士道の相續者を以て自ら任じ自重の心掛肝要の事

## 養蠶家の訓練

山田伊三五朗 著

### 第一章 緒言

#### 農業上に於ける蠶業の地位

農家の副業として、蠶業の必要なることを述べるのであるが、之を述べるに於ては、先づ蠶業が農業上どう云ふ地位を占めて居るかを、明かにして置く必要があると思ふ、是れは地方によつて、一概に云ふことは出来ぬけれども、農業を其の經營上から區別すると、主業と副業との二つになる、主業とは、最も重きを置く仕事で、米麥作の如きもの、副業とは勞力に餘暇があるとき、又は融通し得らるゝ手間を利用して、なすことの出來

農業上に於ける蠶業の地位



る仕事で、穀作の外は一切を總稱するのであるが、養蠶業も此の副業の中に属するものである、しかし養蠶業が副業の全部ではない、副業には養蠶、牧畜、造林、養魚と云ふ様なものは、殆んど一年中行ふことの出来るもの、葉細工、機織り、柳行李等の製造の如きものは臨時に行ふもので、これ等は皆農家の収入を補ふものである、即ち蠶業は農業の中の一部分に属するのである、地位から云へば農業の一部分に属するにすぎないが、農家の収入を増すと云ふ方から云へば、直接に纏つた金が、農家の最も困難の時に取るのであるから、最も貴重なるものなる事が明かである。

### 農は國の本

さて農家に副業の必要なることを、一言せねばならぬが、これを云ふには農業そのもの、貴重なることを知らねばならぬ、これに就ては人によつて色々云ひ方が違ふてある、現に世界で経済學の大家と呼ばれて居るロッ

シエルと云ふ人は「開明の度頗る高等なる國民にとりても、農業は其の他の全般の産業の基礎たること疑ふべからず」と云つて居る、英國のグラッドストーンと云ふ人は「國の實力は農民の殷富にあり」と云ひ、米國の偉人ワシントンと云ふ人は「農は人民職業の中にて最も健全に、最も尊貴にして、亦最も有益なるものなり」と云ひ、どこの國でも農業を最も貴重せられることがわかる、我國では昔から豊葦原の瑞穂の國と稱へられ、農は國の本とせられて居る、若し農業が衰微する様なことがありとすれば、國は貧乏となり、國の獨立さへも保つことが出来ぬ、故に國を富まし人民を強くして、國の力を増さうと云ふのが、農業の發達を圖らねばならぬ根本である、されば主業として、穀作はどこまでも進めなければならぬが、併し穀作農業のみをして居つて、夫れてよいと云ふのではない、生計程度は年々向上して行き、租税も次第に多くなつて来る、故に農家は單に穀作だけして居ては生計を富裕にして行くことが出来ぬので、茲に於て副業が必要



となる所以である。

### 副業として蠶業の必要なる所以

副業は前にも述べたる如く其の範圍が廣い、然し古來我國農家のやり來つた副業が、だんく衰へて行くものがある、例へば昔から作つて來た綿作は、悲しい哉外國品の爲に倒され、甘蔗作を取られ、藍作又奪はれて、其の他にも非常に苦境にあるものがある、この如く我國民の生計に、一日も缺くことが出來ない衣食の原料を今は身錢を出して他國から買入れなければならぬは、誠に心外千萬である、之に反して蠶業は最も有望で、利益が多く、何處でも高低の處で行ふことが出來て、貴賤貧富を問はず、農家に比較的餘裕ある女子によく適するものである、處によると蠶業によつて農家の經濟が維持せらるゝ程の地方もある、關西某農作地の俚諺に、「娘二人持つと屋根が落ちる」と云ふ、之に反して蠶業の盛なる關東の一部では

「娘三人持つと身代が直る」と、よく實際の有様を説いた言葉である、即ち蠶業の有無は、一家の經濟上、かくの如く大なる影響がある。

農家に於ける副業としての蠶業は、譬へば御飯の御かずの様なものである、御飯はあかすによつて食べられ、あかすは御飯によつて食べられる、若し御飯の時にあかすがないならば、御飯ばかり食ふ事も出來ず、あかすだけ食ふことも出來ぬ、農家も之れと同じことで、米麥作は主なる業務であるにより、どこまでも熱心に作らねばらんが、然し米麥作だけではいかに、養蠶なり何なり副業を營んで、農家の收入を増さねばならぬ、即ち農家は養蠶と云ふ副業によつて保ち、養蠶は農家に依つて維持せられ、持ちつもたれつて出來て、農家が維持せられるのである。

### 皇室の厚き御奨勵

かくの如く養蠶は、農家に必要なるのみでなく、國家の經濟上から見て



も貴重である。故に恐れ多くも、皇室に於ては厚く御奨勵遊すのである。昭憲皇太后宮が、御在世の當時、西ヶ原東京蠶業講習所(現今東京高等蠶絲學校)に行啓遊ばされて、下し賜はつた御令旨の一節に、生絲は我國産中其の最も重なるものなれば、一同勉勵益々斯業の發達を圖らんことを望む。

とあるも、御國産御奨勵の御趣旨に基くものと恐察し、恐懼の至である。皇后宮には、年々青山御所におかせられて、御親蠶遊ばさるゝも、蠶業御奨勵遊ばさるゝ事と恐察する、畏くも、皇后宮の御歌に

うるはしき大和にしきも賤の女か  
 かふこのいとそはしめなりける  
 限りなき皇國の富やこもるらん  
 しつか飼ふこの繭の中にも  
 たなすゑのみつきのためしひく絲の

なかし世かけてはけめと思ふ  
 これ等の御歌を拜誦しても、蠶業御奨勵の、厚き大御心の一端を伺ひ奉ることが出来る、されば我々農家は、國の産物をふやして、國を富すと云ふ方面から見ても、蠶業の發達をはからねばならぬ。

繼體天皇詔勅

朕聞く一夫耕されば則ち天下或は其飢を受けん、一婦織らざれば則ち天下或は其寒を受けん、是れ故に帝王躬ら耕して以て農業を勸め、后妃親ら蠶して以て女功を勸む、況んや群寮百姓に在ては其れ農蹟を廢棄し而して能く殷富に至るべけんや、有司普く天下に告げ朕が意を識らしめよ。



## 第二章 養蠶家訓練の必要

養蠶業は覆業となり易し

養蠶業は農家の副業として必要なる事、前に述べたる通りである、幸に我國では官の奨励と、民間の熱心と努力とによつて、養蠶に關する技術や學理は盛に研究せられて、蠶業全體が大に進歩した、然らば今日の養蠶家は、果して懐が肥へて、金持になつて居るか、養蠶隆盛の村は借金が減り、進んで貯蓄額が増えているかと云ふと、最負目に見ても、割合に良い方面に進むものが少い、夫れであるから生絲の値段が少し下ると、養蠶はどうも引合はぬとか、勘定が足らぬとか、極端になると、養蠶するものは家産を倒すとまで云ふ、嘆聲を屢々聞くのである、實際に於てもかう云ふ事が絶無とは云へぬ、されば或人の云ふ如く、養蠶は富國の源泉にあらずして貧國の基であり、農家の副業にあらずして覆業である、即ち養蠶の爲めに

家産が轉覆するのである、此の様な悲惨なる現象を見ると、苟も養蠶家に同情するものならば、一掬の涙なき能はずである。

### 養蠶の秘訣を知るを要す

折角養蠶して儲けがなく、却て祖先代々の資産を減らすものは、養蠶家の訓練が足らぬからである、訓練が出来れば、差引缺損になつたり、資産の減る様なことはない、凶作して繭が取れなかつたり、たとへ取れても其の繭がわるくて、安値により賣れぬのは、養蠶法が判らず、養蠶の秘訣を知らないからである、即ち技術上の訓練が足らぬからである、技術上の訓練と云ふても中々廣いが、一言以て之を云へば蠶兒を愛するのである、いかほどの熟練なる人でも、愛情なきときは、豊美なる繭を收むることは到底出来ぬ、彼の聖徳太子の聖訓なりと傳へらるゝ「蠶を養ふは父母の赤子を育つるが如し、蠶兒を思ふこと我子を思ふ如くせよ、寒暖陽氣の加減



平生我身に倣ひ、温ならず冷ならず、平和なる様陽氣を廻らし、晝夜間斷なく精力を盡すべし」と誠に養蠶家の金言である、我子を育てるが如き精神を以て愛育したならば、何時でも豊作である、然るに蠶兒の食桑中に頭部が透いて、飢を訴へていても、給桑せず放任して置く様な人は、飢に泣く兒に乳を與へない様なものである、蠶兒の眠前には除沙すべきものなるに、除沙せずして眠に就かしたる時の蠶兒の苦悶は、恰も小兒を濡れたる襪襪の中に寝させたと同然である、夜具や衣服の垢染みたるものを着せるに等しい、特に稚蠶は最も愛せねばならぬ、人生を五十年とすれば、二十歳迄が最も大切なる教育の時期である、此の間に於て躰が悪かつたならば、生長の後は涙の種となる、諺に「二十歳過ぎての子の意見、彼岸すぎの麥の肥」と云ふは効がないと等しく、蠶兒の一生を上躰迄とすれば、五齡の中で二齡までが養蠶上最も大切なる時期である、然るに世間では稚蠶の間を粗漏に取扱ひ、壯蠶になつてから病蠶を出して苦心するものがある、

壯蠶に病蠶を出し捻鉢巻して拾い捨てる手間を稚蠶に用ふるがよい。

### 養蠶家の病

蠶兒が病にかゝらずに、豊作しても年々資産が減つて行くものは、養蠶家に病があるからである、病があつてはたとひ發達しても、夫れは眞の發達とは云へぬ、所が養蠶家にこの病が随分少なくない、然らば其の病とは何であるかと云ふと、之迄の貯蓄が減じて借金が殖へたとか、着實にやつてゐたものが虚榮心に驅られるとか、山師が多くなつたとか、田畑の手入さへ怠り勝になつたとか、奢侈に流るゝとか、租税の滞納處分が増へたとか、相當資産あるものが破産したり、墮落するものが増へたとか云ふ悪い風潮に流れて、人氣も次第に悪くなるもの多く認むると云ふことである、これに病名をつけると、怠惰病、山師病、奢侈病、虚榮病等である。

嘗て製絲業界の泰斗郡是製絲株式會社社長波多野鶴吉氏は「日本蠶絲業の



發達は健全なるものでなく、肥満病的發達をして居り、各部に苦痛を感じて居らぬ所はない、即ち蠶種家は蠶種家として苦しみ、養蠶家は養蠶家として煩悶し、製絲家は製絲家として痛みがあるから、五指五體共殆んど痛みを感じて居らぬ處はない」と説いて居られる、此等の病氣は急性もあれば、慢性もあるが、何れにしても大手術を加へて根本的治療を施すてなくば、遂に養蠶家は病の爲めに殞たれるのである。

訓練の急務

然らば養蠶は眞に收支相償はず、又農村の疲弊を來すかと云ふに、決して左様ではない、丸い卵も切り様で四角にもなれば三角にもなる通り、如何に養蠶が儲かるとしても、其の經營法に缺點があり、技術が拙劣では充分の利益を見ることが出来ぬ、彼の愛知縣西加茂郡高橋村の如きは、養蠶によつて年々一戸平均約六百圓の所得があると云ふ、是等の養蠶地は特別に

良い土地であるかと云ふとさうでない、米麥作を怠るかかと云ふとさうでもない、初めは養蠶で随分失敗して、つまらぬ仕事、勘定が足らぬと叫んで居たのである、然るに今日の如く隆昌となつた原因は、指導者の努力に依りて養蠶家の訓練が出来たからである、如何程よい土地あるも、努力豊かなるも、養蠶家の訓練が出来なければ、努力は徒勞に歸し、土地の利用も出来ぬ、現代養蠶家焦眉の急務は、桑園一反歩より桑葉三十貫の増收をはかるとか、掃立蠶量一匁に對して、繭二百匁の増收を研究するよりも、如何にしたならば養蠶家の訓練が旨く出来るかと云ふ事を考究するが肝要である、勿論養蠶する人は大抵農民であり、農民は國民であるから、一般國民としての訓練さへ出来ればよい様ではあるが、仕事が異なれば随て人情風俗も違ふから、特に養蠶家の訓練が必要なのである。



### 第三章 養蠶家訓練の要項

#### 訓練の意義

訓練の意義については、説く人によつて多少の相違があるが、文字通り解釋すると、訓へてよく之れになれしむるので、即ち仕込む事を云ひ又仕込まれて自發的に行ふものも含むのである。之れを大別して精神的訓練と経済的訓練との二つにすることか出来る。精神的訓練とは、國家に對して忠良なる人民となり、又能く地方を愛するの念を養ふので、公共心協同心獨立心勤勞心等の養成は之れに屬するのである。経済的訓練とは技術並に經營上の改良を計り、利益を増し遺利の開拓をなすを云ふので、學理の應用經營上の改善協同勤儉貯蓄等の類である。養蠶家の訓練には右の外色々の事が必要であるが、現今養蠶家の状態より考へて、次の數項にわけて述べやうと思ふ。

#### 一 勤儉

#### 勤儉の誤解

勤とは骨惜みせず、正直に働くことを云ひ、儉とは物を粗末にせず、慾望を制することを云ふのである。蠶を養ふには人手間が澤山いるから、努めて影日向なく眞面目に働き、且つ物を粗末にせず、整理手入を能くして無駄骨折らぬ様にせねばならぬ。然るに養蠶中は殆んど寢食を忘れて働いても、養蠶が終ると怠惰だと云ふのは現今の通弊である。養蠶は春夏秋蠶で終るものではない、養蠶期外は蠶こそいないが、一年三百六十五日の仕事と云ふ考へを持つて、働かなければならぬ。養蠶期中でも仕事に繁閑がある、忙しい時には猫の手も借りたい程であるから、何處でも一生懸命に働くが、如何に働いても養蠶期は、三期通じて百日に過ぎぬ。養蠶中は先づ働く餘地は少いにしても、養蠶期外の長い間なまけて居ては駄目であ



一 勤儉  
る、又所に依ると勤勉を誤解して無駄骨折ることを勤勞なりと思ひ儉約を誤解して桑園の耕耘も三回耕す處を二回に減らし一尺の深さに耕す處を五寸に淺耕し桑園一反歩に十圓の肥料を六圓に減じて施せば儉約なりとするものさへある。

### 大黒天の教訓

七福神と云ふのは大黒天恵美須福祿壽布袋辨財天壽老人毘沙門天であるが、この中で金のある神様は大黒天だけである、それで金の儲けたい人は大黒天の教訓を守れと或人が云はれた、これは面白い解釋であると思ふ、大黒天は如何なる事を教へて居るかと思ふと云ふと右手に持つ打出の小槌と、左手に持つ袋とは勤勞を示して居るのである、大黒天についての歌に。

大黒の槌は土なり能く打つて

こまかになせば金となるなり

大黒の槌を土にたどへたので、耕耘をせよとの教である、又

開をせず身をはたらきて勤めよや

萬の福は勞にこそあれ

笑顔

左手に持つ袋と云ふは、福勞である、福は勞働にある事を示したのである、又色の黒きは儉約を教へて居るのであると云ふが、金を儲けるには勤儉貯蓄が本となつたので、金儲けしやうと思ふものは大黒天の教へを守れとは面白いことと思ふ。

### 怠惰に流れ易し

然るに養蠶は神聖なる勞働を賤しむ嫌ふて、戸外の勞働を喜ばない、勿論社界一般に勞働を忌む傾きはあるが、養蠶家は甚だしく此の弊がある、其の例は桑園の荒廢を見ると勤勞するか、怠惰であるか、想像せられる。今日桑園が立派に出来て居る地方は、培養が丁寧で手間肥を多く用ひて

怠惰に流れ易し



居る、一體桑は深根植物であるから、晩秋又は春には成るべく深耕がよいとは、一般に稱へられて居るが、大抵の處は三寸位である、此の様な淺耕では桑の根が充分生長せぬ、根を充分に培養すると枝葉も自然と繁茂して來る、されば或人の歌に

花を棄て實もむさほらぬ心して

ひたすら根をば養へよ人

とある、根を養ふて居れば花も咲き實も出來ると等しく、桑の根を養へば自然と繁る、それに桑園は恰も三和土の様になつた處へ、金肥のみで三要素の配合をよくして施しても、恐らくは夫れだけの肥効はあるまい、精出し深耕して堆肥を施すと桑はよく繁る位の事は、百も承知二百も合點して居るが、深耕するには骨が折れるから淺耕より行はれず、手間肥作るにも困難であるから、遂に樂な金肥の方へ向いて行くので肥の効が充分でない萎縮病や膏藥病介殼蟲は猖獗を極めて、其の上に毎年三四回も葉を摘み取

られ、且つ雜草が生ひ茂つて宛然包圍攻撃を受けて居る如き状態は、恰も萬斛の涙を吞んで栽桑家を恨んで居るかの如きものさへある、之れは如何に働くと云ふ事を思ひ嫌ふて居るかを知る事が出来る、桑園の荒廢は寧ろ養蠶の怠惰を示すものである。

金錢を浪費し易し

大體に蠶を養ふものは、金が一時にまとまつて這入から、自然と金錢を無駄にし易い、繭を賣つて金が入ると、豫想外の金を儲けた様な氣持になつて、夫れ家の道具より修繕よとい氣になり、細君や娘は得たりかしこしと帶よ着物よとねだる、毎日の飲み食ひ凡てが贅澤になると云ふ有様で、またしく間に縞の財布が空になる、太田太郎氏の著した理想の農村と云ふ書物の内に奢侈に流れることは何處の養蠶地にもある、故に養蠶地の人民は却て財産乏しと論じ、尙漁師肌と養蠶肌と山持肌とはよい三幅



對なり、有る時正月主義なり、貯蓄など夢だにせずと説いてある、余は先月(大正五年十一月)長野縣へ旅行した時、松本市の或商人に、米價騰貴の際には外國米が澤山當地へ來ましたかと問ふたら、「松本で仲買人が外國米を澤山買入れて、一儲しやうともくろんだものがあつたが、いくら地米の値段が高くなつても、外國米を買ふもの殆んどなくて大損をしました、養蠶地では米價の高い位は平氣なものです、諺に信州の着倒れ食ひ倒れ」と云ひますが、實際生計は中々贅澤です」と云はれた、それから酒の消費量多い理由を尋ねたら氣候が寒いからだとも云ひ、又養蠶で金廻りがよいからだとも云ひます、例令氣候が寒いにしても、養蠶に依りて儲けなければ酒は飲めませぬと語られた、右の如く養蠶家は概して金錢を浪費し易いから、金に醉はない様に努め、以て奢侈浪費を警戒せねばならぬ。

二、學理を應用すること

學理を無視するものは骨折損の草臥儲け

今日の養蠶家は、どうしても最新の學理を應用せなければ、生産の増收を望むことは出来ぬ、然るに養蠶家の中には、徒らに舊い習慣にとらはれて、何等改良進取の途を講ぜざるものあるは、誠に慨嘆の至である、故に今後は學理の應用に努め、舊慣に拘泥せず、迷信を打破し、何處へ迄も研究せなければ、随分骨折損の草臥儲けとなる事が多い。

或る所の小供が庭に杭の拔跡の五六尺の深い穴へ護謨手毬を落した、それ兩親に向ひ拾ひあげる事を聞いた處、父は竹で挾てあげよと云ふたが穴は深くとても挾めぬ、母は竹の先を尖らして突きさしてあげよと云ふたが、夫れでは手毬に穴があいて後が間に逢はぬ、萬策茲に窮して居た處へ小供の兄が歸つて來た、夫れで小供が手毬を拾ひあげて相談する

學理を無視するものは骨折損の草臥儲け



と穴へ水を入れると手廻は浮きあがると、兼て學校で氣體は液體より軽いことを教はつて居ることを云ふた話がある、世間の所謂經驗のみで學理を無視するものは、多く此の類である、随分滑稽なこともある。

### 蠶糞の不始末による損失數百萬圓

今日養蠶家に知識の乏しきは、蠶糞の處理法のみにも知ることが出来る、蠶渣は如何に始末せらるゝかを見ると、其の多數は庭後の芥溜場に棄てるか、然らざれば蠶渣の出来るごとに田畑に打棄てられて、或人が皮肉云ふ如く三晒である、即ち雨晒日晒夜晒である、故に降雨の際には恰も醬油の様な液汁が滔々と流れてある、之れ貴重なる肥料分である、堆積して放任して置くときは蠶糞は白く微びてふわ／＼で、肥料として損失のあるは養蠶するものゝ能く知る所である、然るに養蠶家が平氣でかゝる損失ある事をして居つて、徒らに金肥のみを施して以て桑園の肥培を完ふし得た

と思ふて居る様な状態では、養蠶家も學理を應用して居るとは云へぬ、若し肥料の學問知識があるならば、新しい蠶糞は丁度新しい人糞尿の如く、腐敗酸酵すると激しい熱がで、作物種子の發芽を害する事が往々あるに依り、豫め肥溜に投じ置くか、或は堆肥舎内に一旦堆積腐敗させた上で、使用することの有利なるを知るであらう、更に蠶渣百貫に付て過磷酸石灰四五貫目撒布すれば、其の肥効を少しも減ぜずして、蠶糞含有磷酸分の不足を補ひ、肥料配合上から見ても最も有利なることを知るであらう、蠶糞の貯藏不始末に依る窒素損失量を、本邦通じて金五百四十萬圓になると計算した學者もある、以て養蠶家の學問知識の乏しき爲め多くの損失を招いて居るかを知らることが出来る、加之蠶室の軒下に蠶糞を放置するときは、悪臭を出すから蠶兒の衛生上にも悪い、佐藤友信と云ふ人の著はした養蠶茶話には、養蠶の禁物として蠶屋近く蠶糞置くべからずと戒めて居る、養蠶家の學問知識に乏しきは單に蠶糞の處理法のみではない、第一に肥料と



しての最も大切なる三要素の配合さへ知らぬものがある、又配合はわかつても、窒素は如何なる肥料が安いかと云ふと、存外分らぬものがある様に思はれる、夫れであるから、肥料知識のないものが、桑園一反歩に二十圓の肥料を施すよりも肥料知識のあるものが十圓施す方が、却て收穫の多いことがある、之等は單に肥料の事だけであるが、桑の作り方にしても、蠶を養ふにも、大抵がかう云ふ状態であるから、之等の損害を合せたなら随分莫大なる金となるであらう。

婦人知識の程度を高むべし

養蠶には大抵婦人が仕事するのであるから、婦人の知識程度を高めることが必要である、然るに遺憾な事には一般に婦人の學問知識が乏しい、聞く處に依ると西洋の農家では、婦人について牛の事を尋ねると、種類は何處、原産地は何處で、何時生れて、體量はいくらで、一日の搾乳量いく

らと云ふ様に能く知つて居る相である、之れに反して我國養蠶家の婦人について、蠶種の種類を尋ねると、其の名稱や蠶種製造者の姓名すら知らぬものさへある、其の蠶種の系統はどうで、如何なる特性があるから、飼育上にはどう云ふ點に注意せねばならぬか等はわかる筈がない、之を西洋の婦人の知識に比べるときは雲泥の差ありと云ふも過言ではない。

或る養蠶家に病蠶が発生したときに、婦人が給桑の傍ら病蠶を手で掴んで、之を庭先や床上へ處構はず、手當り次第拋棄するのを見た、これは病蠶の種子を蒔く様なものである、病蠶の口や肛門から出る液は病源がある赤痢病や虎列拉病人の吐き下したものの、始末をして、手も洗はずに握飯を食ふ様なものである、又桑葉や蠶兒の容器に、蠶糞や病蠶を入れて、其の容器を洗ひもせず、消毒もせずして桑葉を入れたり、蠶兒を扱ふたりするものさへある、味噌も糞も一所とは此事である、西川桑蟲と云ふ人の一と口癖に「養蠶者家の蠶はなぜ空頭病になるでしよ」巡廻教師貴方の頭が空だ



がらと皮肉を云ふて居る、空頭病に限らず、其の他の蠶病も、飼育者が空頭病となり、學問知識がないから出来るのである。

### 三、協同

#### 養蠶家共同の利益

協同とは心を合せて一致の動作を取ることを云ふのであつて、老人と青年と男と女と家の富めると貧しきとを問はず、同心一體になつて本務を盡すを云ふのである、今後養蠶家はどうしても協同するてなくば、收益の増加を計ることは出来ぬ、たとへ技術上の改善發達は出来ても、協同するてなくば蠶業の健全なる發達を望むことは難い、よく人の云ふ事であるが、喧嘩をするときには誰も握拳でやる、五本の指を別々に働かすと力が弱くウンと一つに握つた方が強いことを知りながら、養蠶家の共同した方に、力の強いことがわからぬ筈がない、されば養蠶家は部落は勿論、村郡と協

同戮力し、一面に於て製絲家と蠶種家と提携共同して、以て利益の増進を圖るに努めねばならぬ。

養蠶家には協同して仕事をすれば利益のあることが餘程多い、蠶種の催青の如きも各自が行ふときは、費用が嵩み且完全に行ふことが至難である共同催青にすれば勞費少く且つ安全である、稚蠶共同飼育の有利なることも、普く養蠶家の知る所なるに、多くは各戸勝手に行ひ共同飼育をなすものは甚だ少い、僅かづゝ飼育するものが、二三十戸一所に集めて、熟達せる人に託して、催青より掃立或は一二期まで飼育するときは、其の勞費を省くこと實に大なるものである、蠶種の購入にしても概ね各自随意に買ひ入れ、善良なるものを共同購入するもの少きは甚だ遺憾である、或人嘗て蠶種製造人に向ふて尋ねるに、蠶種は何故に高きや、安價にて販賣しては如何と、其の時蠶種製造人は答へて、我等は蠶種を賣る爲めには此邊彼邊と歩き廻らねばならぬ、又或時は暇潰しと思ひながら、茶飲話もせねばな



らぬ、所謂此等の費用も蠶種代に含んであるから高いのである、若し一村なり一部落なり共同して購入して呉れるならば、確かに一枚につき四五十銭は安くなるであらう、と是れ蠶種製造家の詐らざる告白である、蠶飼ひは利益薄しと啣ちながら、蠶種製造人の茶代旅費日當迄も支拂ふて購入するてはないか、加之各自に購入するときは、催青に飼育に繭販賣に齊はざる不利がある、又蠶種製造業者は巧言令色を以て養蠶家の歡心を求め、次には遠路を厭はずかけづり廻つて、所謂一口二脚三たね主義で蠶種を販賣するもの今尙盛に行はるゝは、養蠶家に共同の行はれざる證據である、安物買の鼻落しは共同購入せぬものに多い。

### 共同販賣の利益

更に協同經營の必要なることは生産品の共同販賣である、近頃は戴星踏月流汗辛苦して、あらゆる努力を盡くし、豊美なる繭を得て養蠶に於ては

成効しながら、最後の繭の販賣に於て失敗するものがある、港で船を覆すとはこれである、只今では養蠶に熱心であつても、繭の販賣に注意せぬと、折角の苦心も水泡に歸し、所謂百日の説法屁一つとなつてしまふのである、埼玉縣入間郡吾妻村では、製絲家や仲買人が養蠶家を各戸に廻つて、繭を買ふた、繭買ふ人は概ね繭の良い悪いを見ず、其の時の景氣や、養蠶家の腰元を見て購入し、折角苦心して得たる繭も、眞價に賣れず爲に改良の實踐が容易に顯はれなかつた、たとい上繭は相當の値段に賣れても、玉繭二等繭は半値にも賣れなかつた、其の時分は丁度

繭買ひや仲買ばかり世に出て、

蠶かひこそ椽の下なり

と云ふ状態であつた、だが是では養蠶家の利益を見ることは出來ず、何時までもかやうな事では養蠶の發達にも障害がある、何とか方法を設けなくてはいかぬと云ふので、村の有志が種々考究の結果、繭の共同販賣所を設



けて共同入札に附した、すると今度は大層値がよく賣れた、夫れて。

蠶飼ひ椽の下より力味出て

繭買ひ仲買ひ尻餅を搗く

と云ふ様に變つて來た、共同販賣した爲に、買手は苦しみ養蠶家の力が強くなつたのである、されど之では尙永遠の利益を圖る方法ではないと云ふて、養蠶家が集談會を開いて、協議した處、石川製絲と特約販賣するとに一決して、養蠶家は製絲家の希望する繭を蠶種製造者に注文する、製絲家も亦製種家の方へ注意すると云ふ様になつてから、年々其の成績がよろしく、繭買上代金の内より幾分づゝ出して貯金して居られるが、僅か三年の間に千六百餘圓の積立金と三百餘圓の貯金が出来た、是れ或人の云ふ通り蠶飼する人も種屋も製絲家も

あいあい傘であゆめ世の中

かう云ふ風に凡て共同經營すれば、金錢上の利益があるばかりでなく、

身心を勞すること少く、又失敗を未然に防ぐこと等の、間接の利益が實に大なるものである、之れ即ち協同の利益である、協同の賜である。

### 三業者提携の必要

京都府何鹿郡に於ける、蠶繭正量取引法の實施は、蠶業發達上次の如くに便益を與へて居る。

一、養蠶家は繭賣りについて賣先の心配なく、且つ玉石混淆の賣買でなくて、繭質相當の價格で販賣することが出来るから、其の經營は健實となり、繭質の改良を圖るに其の効果は最も適切である。

二、製絲家は繭の眞價で、原料繭を購入し得らるゝから、經營の基礎は強固で、事業は着實である。

三、直接取引は仲賣商人を省くことが出来るから、其の利益として奪はるゝところは養蠶家製絲家の所得となり、其れだけ繭價を高めること



が出来る。

四、繭正量取引法は共同販賣を基礎となすによつて、従つて蠶種の共同購入又は共同製造、或は共同催青共同飼育等の共同組織を促して、經營を節減することが出来るから、此等の利益も大なるものである。

五、成績の優良なる養蠶組合に對しては、特に授賞せらるゝに依り、改良の實行を共同的に行はしめることが出来るから、協同心を養成すると同時に、又斯業の奨励をなすことが出来る。

養蠶家と製絲家と蠶種家とは、恰も鼎の如き密接なる關係がある、この三業者が相提携連絡して、歩調を一つにし斯業の發展を講ずるてなくば、健全なる發達を望むことは出来ぬ、唯自分の利益のみを本位として、他はどうしてもよいと云ふようでは蠶業上から見ても甚だ恨事である。

#### 四、經營法の改善

#### 山師的經營を排す

養蠶を安全に營まうとするには、自家の勞力と桑園とを基礎として計畫を樹てることが肝要である、無暗に多くの蠶量を掃立て、多くの人夫を備入るが如きは失敗の基、貧乏の始である。

然るに養蠶は昔から運の蟲とか、氣候の蟲とか、或は養蠶の結果を當るとか當らぬとか、宛然富籤同様に考へて居るものさへあるは遺憾である、又一朝養蠶がよいと云ふことになる、唯れも彼れも養蠶を擴張し、是れまでの水田は變じて桑園となる、俗諺の

田畑潰して桑の樹植ゑて

末は食ふ氣か食はぬ氣(桑の樹)か

との冷評すらあるは誠に慨かはいし次第である、之れに反して米價が騰貴して、生絲の値段が下落すると、今度は桑園直ちに變じて水田となる、

山師的經營を排す



折角勞費をかけて植付けた桑が、未だ充分も成育しない内に堀かやされる  
 勞して功なきことを火を吹いて灰残ると云ふ、灰ても残ればまだよいが、  
 借金が残るとなつては、哀れと云ふも愚なりである、又何の準備もなくし  
 て今年に桑葉が安くて繭價が高いと見込むときは、一攫千金を夢みて、無  
 謀の掃立するものは、一朝桑葉騰貴に際して、可憐なる蠶兒を土埋水葬し  
 て、悲惨なる失敗を演じ所謂骨折損の草臥儲けとなることが少くない、是  
 れ恰も兵糧なくして戰爭すると等しいやり方である、或人の狂句に。

買桑て蠶は當り金は減り

と蠶兒の食物は桑であるとは誰も云ふ、併し近頃の蠶は色々の物を食ふ、  
 處に依ると家屋を食ふ、倉を食ふ、田畑を呑む、三寸足らずの蟲だとして中  
 々油断はならぬ、それで又或人の狂句に。

桑食はぬ蠶が家や土藏食ひ

横の擴張よりは縦の擴張

或る農政學者は、耕地を横に一割二割と擴めるよりは、寧ろ縦に擴める  
 方がよい、即ち之まで二三寸耕して居たものを七八寸に深く耕し、枝葉を  
 空間に伸ばす様にした方がよいと云ふて居られる、之れは養蠶家の大に味  
 ふべき言葉であると思ふ、實蹟に徴するに桑園三反歩所有するものが五反  
 に殖やすよりは、寧ろ三反の桑園の肥培を充分にした方が、五反に殖やし  
 たよりも却て收利の多いものである、之れについてはよい實例がある。

愛知縣南設樂郡長篠村の松井喜次郎氏は、明治四十四年に御國桑を殖え  
 付け、五年目に一反歩より一千〇四十六貫を收葉し、世人を驚かした、其  
 の土質は壤土であつて、整地は深さ二尺五寸に天地返しをして、柴草堆肥、  
 大豆粕を與へて、一畝に三十本の割合で植付け、六拳式中刈仕立て夏秋蠶  
 用桑園である、肥料は五年目の反當り、堆肥一千五百貫、大豆粕百四十貫



大豆緑肥二百五十貫、過磷酸石灰二十貫、木灰百五十貫を施したものであ  
る。収入は夏秋蠶用桑千〇〇六貫、春蠶用桑三十五貫、枝條百五十束、  
接木穂一萬本、桑皮五十貫を得たのである。是れによつて見るときは、栽  
桑上に努力して合理的に行へば、大抵の處では一反歩より四百貫を收穫す  
ることは敢てむつかしい事ではない、かくの如くに桑園に於て縦の擴張は  
各地に行はれて一反歩桑葉五百貫會桑條一丈期成同盟會等の奨勵法が設け  
られてある、横の擴張もよい事であるが縦の擴張が一層必要である、現今  
我國の桑園一反歩平均收葉量は約百七十貫である、三百貫位の收葉する桑  
園を上々の作として居るのは、未だ改良の足らぬ證據である、將來大に努  
力せねばならぬ。

養蠶はなるべく、一回に多くの掃立をなすことをさけて、農閑の時期を  
撰んで分けて飼ふ方が得策である。

### 事業の計畫を樹てること

凡そ事業を經營するには、必ず經營の方針を定めて計畫を樹てることが  
大切である、即ち春夏秋蠶の割合及び分量は、如何に掃立すべきか、又蠶  
種は如何なる種類を飼ひ、繭はどの方面に販賣するか、桑の肥料は何時何  
々を施し、耕耘は何時頃はどう云ふ方法でして、若し一人手が不足した場  
合には凡そ幾人を何處から雇入るか、等經營の方法を定めて置かねばなら  
ぬ、若し然らずして漫然と掃立を行ふて、桑葉や人手が不足して、思ひ掛  
けない失敗したり、桑の肥培は打捨て置いて、眼前の小利に惑はされ、無  
暗に摘桑して、無謀なる養蠶をするものは、暫時にして桑園を荒廢せしめ  
結局損になることが往々ある、これ等は初めに計畫を樹てない報である。  
商業者は最初に於て、周到なる注意を拂ふて計畫を樹てる、即ち商業  
者であれば、原料はどの方面より仕入れて、どの方面で賣捌くと其の賣上



げはいくらになるから、どれだけ利益が得られると云ふ様にして居る。又工業者も緻密なる設計を作り計書は大抵完全に出來てある、然るに農家なり養蠶家なりには概ね事業の計書がない恰も的なき處に矢を射ると等しいものである、うましくいつて儲けがあればまぐれ當りて、多くは失敗に終るものである、勿論其の歳の氣候や仕事の都合で、計書を變更せねばならぬ場合もあるが、それが爲に計書を無視するは、堅實なる養蠶家の取るべき途でない、故に養蠶家は最初に於て研究考慮して、如何なる方針を取り進むべきか、又其の方針を定めた上は如何なる方法を取りて調理鹽梅すべきかを決定して置かねばならぬ、かくの如くにして始めて鞏固なる基礎の上に健全なる發達を遂ぐる事が出来るのである。

### 五、經濟思想の養成

#### 養蠶失敗の原因

養蠶業は云ふまでもなく營利事業である、故に養蠶家は常に經濟のことを忘れてはならぬ、若し經濟的思想がなくなれば、如何なる良法妙計あるも、到底其の目的を達することが出來ぬ、養蠶改良の必要が世間で唱へらるゝ程發達せないのは、經濟的思想の乏しきによること決して少くない、其の證據には養蠶家に養蠶の收支を明かにした帳簿のないことである、爾代に數百圓を得るもので、帳簿を備へ置くものは、誠に曉天の星である、大抵のものは儲かつたのやら、損したのやら分らぬ位である、従つて損しても何故に損であつたか、經營上如何なる點が缺けて居つたか、又如何に改善せば利益が得られるか、分らぬものがある様に思ふ、故に舊慣のみを墨守して、改良進取の途を講ぜないから、養蠶しても骨を折る割合に儲からぬと、嘆聲を漏すは當然である。

例を以て示したならば、僅かに蠶量の十数程掃立るものが、宏大なる蠶室を建て、宛然大事業家の如く装ふものがある、又地方に依ると、各戸



競争して高壯なる蠶室を建ててものざへある、斯様になつては養蠶の利益で、金利さへ出来ず何時迄も負債に苦しめられなければならぬ、之れと反對に、一期にても蟻量の二三十匁も掃立るものが不完全なる蠶室であり、設備がとゝのはざる爲め、毎年七八分作より繭がとれぬにもかゝらず、氣候や蠶種に罪を嫁して、更に設備を完全にしやうとはせぬものもある、これ等は自負心の手傳ふのでもあらうが、損得がわかつたならば蠶室も改善し設備も改めるであらうから、従つて利益も得られるであらう。

一文惜みの百知らず

養蠶家に經濟思想の乏しきは繭賣りにでもわかる、自家で繭十貫目が五十圓に賣れるものを、市場へ出して二三十錢高く賣つて利益を得たと思ふて居るものがある、運搬費がいらす、宿泊料も要せず、又問屋の手數料もいらねば高いだけ儲となるも、之等に金が入れば、却て自家で販賣するが

得策である、又養蠶て失敗して居るものを見るに、多くは僅かの費用を惜み、所謂一文惜みの百損をして居るものが多い、春蠶の稚蠶期に於て、狭い蠶室で多くの蠶見を置き、炭火を節約せん爲に、空氣抜や欄間を閉めたて、失敗するものがある、消毒薬代をおしんで、病蠶の出て後をも消毒せず、再び失敗を繰り返すものがある、故に養蠶家は金を費ふ場合には、能く其の輕重緩急を計り、必要なる費用は惜まず出し、必要でない所には一厘一錢の金と雖も粗末にせぬ様心掛けねばならぬ、唯金が入るからと云ふては出し、金廻りが悪いからとて必要缺くべからざる事までも中止する様なことでは、何時までたつても、一家の經濟が向上發展することは難い、

虚榮心に驅られ易し

尙養蠶家の弊習は虚榮心に驅られ易いことである、木村良氏は養蠶家の外觀を街ふものあるを説いて曰く「農業家の行り口について不思議に思ふ

虚榮心に驅られ易し



ことがある、何であるかと申しますと、米と云ふものに對しましては、取  
 れても取れぬ様な顔をし、之に反して蠶と云ふと、取れなくても取れ  
 た様な顔をして自慢すると云ふ事があります(中略米の方であります、翌  
 年になると申しますには、去年は結構でございましたが、今年の本當にい  
 けませぬと云ふ、然るに養蠶の方になりますと、窃と澤山棄てに行く様  
 人でも豊作を装ふと云ふ風があります云々」と實に穿ち得た言葉である、  
 單に養蠶の凶作であつたことを隠すばかりでない、繭の販賣にしても、隣  
 家より繭値段の安い事を發表せらるゝことを恐れて、こみいくらと云ふ風  
 にして、單價を高めて之を他にほこるものさへある、加之養蠶後に隣の妻  
 子が着物を新調すると、自分の方でも拵へねば、肩身が狭くなるかの様に  
 思ふて、競ふて新調する處がある、道具でも、蠶具でもいらぬ處に見えを  
 張るものが随分多い。

### 六 獨立心の養成

#### 依頼心は養蠶に大敵

養蠶家に向ふて、これくの事が一番よい方法であるから、あやりにな  
 つては如何ですと勸めると、直ちに補助金がありますか、幾何程金が貰へ  
 ますと聞くものがある、夫れて有利なる事業も補助金がなければ容易に出  
 来ず、たとひ補助金が幾分交付せられても、眞面目に仕事をしやうとせず、  
 補助金さへ得ればもう夫れてよいやうに思ふて居るものもある、斯ういふ  
 風で、凡てが官に頼り、人に依頼し、天を恃みにし、地にもたれて、己が  
 奮闘努力により、事業の發達を圖らうとする意氣の乏しきは、養蠶家の弊  
 風であつて、又進歩の遅々たる原因である、現代の養蠶家は獨力で出来ぬ  
 ことは、他の助を請ふもよいが、出來得るだけは各自に働き、計畫も樹て  
 仕事を仕上げると云ふ抱負がなければならぬ、依頼心は養蠶經營の障害



物である、敵であると心得、萬事己の仕事は己が腕で開拓する心がけが大切である。

### 自負心

獨立心を養成するときは、凡ての事物を研究する様になる、此の研究心は養蠶上最も大切である、然るに養蠶家には自負心の強いものが多い、所謂天狗が多い、或る蠶業技術者の語つた中に、「何處の養蠶家も天狗さんが多く、鼻につかへて歩けぬ」と實際の経験あるものでなくても、二三年豊作すると直ぐに天狗になり易い、けれども天狗さんは三四年目には、大抵失敗して居る、田中瑞穂氏の狂句に。

蘭買ひに 天狗が鼻の尺とられ

日本第一の製絲場地となつて居る、長野縣諏訪郡平野村の役場で、余は「岡谷製絲業の隆盛なる原因は、土地勞力資本何れが有利なのでありますか」

と問ふた處、助役は「土地勞力資本は、當地より却て他に於て、本村より有利の地があります、當地の進歩した原因は、此等の要素ではなく、全く製絲業者の研究心の強い故である、故に他の人が製絲して、失敗した處へ行つても、當地のものが經營すると、金儲して居るのである」と語られた兼て新聞なり雑誌なり、或は人から聞いて、長野縣製絲家はあくまで奮闘努力するとは知つて居たが、實際を見て更に其の感を深くした。

### 迷信を打破すべし

かひこと云ふ字を昔は蚕と書いたものがある、今日でも略字として用ふるものもある、又蠶を蚕と書く、文字の穿鑿はやめにして置くが、實際に天の蟲である、神の蟲であるから、少しの誤魔化しもさかぬ、拙劣の養蠶してよき繭作つて呉れる様に祈つても、さううまは問屋が卸さぬ、頭光や起縮病が出来てから癒る様にと、天道様に祈願しても、叶はぬ時の神だ

迷信を打破すべし



のみで、天道様は知らぬ顔して、他處を向いて笑つてござる、平生に於て眞面目に飼育して居れば、蠶兒は正直です、必ず夫れだけの御禮を繭で返します、其繭がとれなかつたのは、飼育中に親切にして呉れなかつた事を訴へて居るのである、可憐なる蠶兒を頭光や起縮病にかゝらせたのは、蠶兒を死物扱ひにしたる報ひである、かう云ふ飼方する人を蠶兒は血涙を濺いで恨んで居る、久保田松吉氏の句に、

丹精の家に蠶の外れなし

現代の養蠶家は迷信を打破せねばならぬ、即ち御幣擔ぎを歇めにするのである、例へば蠶と馬とは關係があると云ふて、蠶種を洗ふにしても、午の日に水に浸し、酉の日に取りあげると、ウマクトルと云ふて、文明開化の今日、尙三千年も前の支那人の臆説を信じているものがある、催青や掃立の日も午の日に行く、又立派な家の門口に、不潔なる馬の靴を吊したり座敷の裡で馬糞を燻じたり、初午の日に團子を製したり、宮参りをして祈

願したりするものが、存外進んだ養蠶地にもある。

昔或る御幣擔ぎの夫婦暮があつた。平素は夫婦仲善く日暮していたが、或る年の元日の朝夫婦喧嘩をした、喧嘩の起りは婦人が土瓶をわつたので夫が怒つたのである、其處へ客が来て何事ですと問ふたら、婦人はかく

〳の次第であるから仲裁を頼むと云ふ、それでは客は次の歌を讀んだ。

何時とても目出度からざるわれ土瓶  
日にもよりけり元日の朝

御客は又土瓶はわれたが、金の手はありますかと尋ねると、あると答へたので、夫れは誠に結構ですと云ふて一首作つた。

元日に食と貧土瓶とを打ちわつて

後に残るは金のつるなり

御幣かつぎの夫婦は、此の歌で考へなほし、食と貧土瓶をわつて金のつるが残つたから之れより金儲けが出来る、と大喜びて夫婦喧嘩は歇めにな

迷信を打破すべし



つた、その上御客を酒肴で待遇し、歸るときには御禮として二朱金を出した、御客は又一首作つて、

元日に餘儀ないことを頼まれて

一首の歌が二朱となりけり

迷信家は多くが斯様である、近來學術の進歩によつて、養蠶家の迷信も大に打破せられたが、今尙ほ古來の迷信がないとも云へぬ、これは單に前の午の話のみでない、蠶の忌みものとして稱へられるものに、烟草石灰油類茶桐藍雷鳴音響動搖臭氣死服血服曰く何々と、かぞへて來るとこの様なこじつけ理窟の傳説迷信が澤山ある、かゝる迷信によりて心を千々に碎く如きは、現代養蠶家のとるべき方法でない、古き養蠶書養蠶茶話の中に「養蠶は婦人の取扱ふもの故、愚知我慢多きものなり、變出ずれば種元を恨み、又は忌服のさはりにて變出るなど云ふ、蠶に會て忌穢の沙汰なし」とあるも、迷信にとらはれない様に教へたものと解する。

### 第四章 訓練の方法

#### 一、訓練の手段

##### 耳よりする方法

訓練の要項は前に述べた通りであるが、養蠶家は一般に見聞になれず、研究することの少く、知ることに縁遠く、専門の學理にさへ冷淡である、故に如何にして訓練すればよいかと云ふ事は、餘程の工夫と注意とを要するのである、それと訓練の手段として、何處でも行はるゝ方法は、第一に耳よりする方法である、即ち講習講話講演會を開いて蠶業上の話をして、多數の人の耳より脳髓に入れる様にするのである、蠶業上技術の改良が出來、又經營法の改善せられたる處では、今尙此の方法で着々効を奏して居る所以である、處が世人は蠶業講話會を開いても、どうも人の寄が悪いとか又今日各町村に技術員が設置せられて、各戸を巡廻して實地の指導をし



て居るに、講話會を開いた處で何の役にたつものかと、耳より注入する方法を輕んぜらる、かう云ふ人は有益な話でも、活きた實際問題でも、只茫然として聞き流しにして、應用に努めやうとはせぬ、昔に教へられたる見ざる、聞かざる、言はざるの「三ざる」は、今日には實行すべきものでないと思ふ新渡戸博士の書物に坪井正五郎氏の三猿主義に反對の句がある。

よき事を見ざる聞かざる云はざるは  
人とうまれし甲斐もあらざる

見たり聞いたりせずして事業の進歩は望まれぬ、故になるべく多く耳より注入する心がけが大切であると思ふ、講習講話の主催者は丁寧親切を以て聴講者を勧誘して可成多からしめ、且つ用意周到にして講話會の効果を大ならしめ、講師は話上手で且つ熱心にその上話方に趣味ある人を撰擇してほしい、主催者が冷淡である爲め、折角の講話會も無意味になつたり、講師の話方に趣味なく、熱心を缺き、甚だしきは無責任なる話をして、主

催者に迷惑をかける様なことがあつては遺憾である。

### 目よりする方法

目で實際の事物を見せて指導することは、一層印象を深からしむるものである、所謂百聞一見にしかずである、實際に於ても衣服の美麗なるものがあることをいくら説いても、買求める氣には容易にならぬものであるがそれに廂髪があかいこぐるみて居るのを見ると、大抵眉尻を下げて見惚れて、心が動かされ借金を質に入れても買ひたくなる如くに、目は感じを與へ、悟り易からしむること、耳よりも更に有効である、實物を見せるのがよいと知りながら、面倒臭いとか、邪魔臭いとか、世話だ厄介だと云ふて現物を見せるものが少いから、食滯する程に聞き、耳は聞きあきて章魚が出来る様になつてあつても、智腦は一向肥えず、不相變眞相がわからぬ所以である、故に品評會展覽會等を開いて、養蠶家に技術の優劣を競はし



め、無言の内に悟らしむること、或は改良の實蹟を示すことは最もよき方法である、其の他養蠶の進んだ地方を視察するとか、製絲工場なり蠶種製造家なり、又は縣郡の施設事業或は組合事業等を視察する如きは、更に一層よき方法である、故に視察と云ふことは近來大流行してあるが、視察には皮相の觀察では何の役にもたぬ、規則や形式を見ただけでは間に逢はぬ事業其のもの、精神を觀破するの觀察力がなければならぬ。

或る家の娘が某養蠶傳習所を修業したので、翌年自分で養蠶したが、困つたのは眠除沙の時期である、何時頃行ふてよいやらわからず、そろ／＼教科書を出して見ると、一箔の蠶座中數頭の眠蠶が現はれたとき、眠除用意の粗練を入れるべしとあるので、娘は得たりかしこしと蠶兒を見た處が五六頭餘色になつた蠶兒が現はれて居たので、直ちに練入れをして二回給桑後眠除をした、後で數回給桑したが、まだ半分程眠に就かず大に閉口した、之れに困りて第二齡には反對に遅くしたら、今度は眠蠶が反對に半分

許り蠶渣に残つた、夫れて又困つて三齡には早くし多く振桑して失敗し、四齡もやりそこなつたと云ふ話がある、之れは實物で教はつてないので、眠蠶が如何なるものであるかが、充分に徹底しなかつたのである、實物を見せて充分に理解せしむることは、凡ての點に於て必要である。

### 行ふて見る方法

耳よりする方法よりも、目よりする方法よりも、更に一步を進めたる方法は腕よりすることである、夫れて昔から論より證據と云ふ、實驗實行して見ることが最も捷徑である、所謂百聞一見にしかず、百見一行に如かずと云ふ通り、百遍の見聞よりも、一行して後に悟りを開くことが、最も印象を深く且つ強くするのである、徒らに空想にふけりて屁理窟を云ふものは、立派なる養蠶家としての資格を缺いたものである、或人の狂句に

理窟屋は兎角蠶を拙劣に飼ひ



とある、何處でも厩理窟糞理窟云ふものに、良い蠶の飼へた例はない、一體養蠶家に三種の種類がある、第一は蠶飼ひの繭取らずと云ふ、蠶見は澤山になるが、上簇迄に大概斃れて、繭らしいものは蠶兒の数の三分一も取れぬものは、即ち此の種に屬する、第二は蠶飼ひの儲け知らずと云ふ繭は澤山取るが、勘定すると何時も金が足らずに、草臥儲けとなるものは此の種である、第三は蠶飼ひの損知らずと云ふ、生絲の値が安い時でも、相當の利益を得て、生絲の値が高くなつたからとて、餓鬼が御菜にありついたと云ふ様なことはせぬ、之れが眞の蠶飼ひである、處が世間では蠶飼ひの繭取らずか、又は儲け知らずが少くない、其の原因は即ち桑園深耕の必要なることは説き得ても、自ら鋤を握ることを知らず、窒素磷酸加里の三要素が肥料として貴重なることは知り得ても、手間肥を作ることが出来ず蠶を飼ふには愛の心を以てせよとは云ふが、給桑さへろくさまに出来ず、蠶體病理生理の講釋は上手だが、毎年蠶兒が四五齡になると嗅氣鼻をつく

腐り蠶を出し、蠶室蠶具の改良を絶叫しても、繩一つ縛へず、養蠶經營法の改良談は立板に水流す様に話すが、懐中は火の車が廻つたり、する様なことで、如何にして立派な結果を得る事が出来やうか、不幸にして我が蠶業界はかう云ふ人が少くない。

或る雜誌に次の歌が書いてあつた

目に見せて、口ではなして、して見せて

やらせてほめねば、やりはせぬなり

と此の趣旨は、實際を見させて、講習講話して實行させ、其の上をやつたものを賞めて行かねば、誰もやらぬものである、この内の二つか三つが充分行はれても、一つが缺けたり又完全でなかつたならば、いかぬものであることを教へたものである。

## 二、訓練の機關

行ふて見る方法



町村の役場、學校、神宮、僧侶、養蠶組合、蠶業技術員等は、團體と個人とを問はず、凡て訓練の機關である、之等の各機關が提携連絡して、訓練に努めたならば其の効果は實に著しいものである。

### 町村當局者

町村當局者は農村教育、養蠶家訓練の中心でなければならぬ、現今養蠶の進歩發達したる地方は、町村役場員が養蠶家の訓練に努めた所が少なくない、愛知縣西加茂郡高橋村では、全農戸數七百六十六戸の内、養蠶戸數は七百三十八戸ある、大正五年に於ては一戸平均約六百圓の繭賣上代金を得て居る、如此隆盛になつた原因は、同村長今井幾次郎氏が十年一日の如く、養蠶家の訓練に努力せられたることが、最大原因であると思ふ。同村長は四年毎に村治方針を立て、之を一般村民に徹底する様に努力して居られる、此の方針に依り村農會を利用し、養蠶組合を動かし、又は縣

郡の技術官を聘して援助せしめ、或は養蠶教師を督勵して居られるが、日を追ひ年を重ねて進歩するのは、養蠶家が如此にして訓練せらるゝからである、然るに養蠶訓練上何等の方針もなき處あるは、甚だ遺憾である。

### 養蠶組合

養蠶組合は一町村を網羅するものあり、或は一字又は一部落を以て組織するものあつて様々であるが、何れにしても一致協同して、團結を強固にするの肝要なるは勿論である、しかして組合は當然の事業として、共同催青、稚蠶共同飼育、蠶種蠶具、桑葉肥料等の共同購入、成繭販賣、桑樹病害驅除、霜害共同豫防、蠶病消毒、養蠶教師の招聘等は云ふまでもなく、或は時々講演會を開きて技術經營の改善を計り、或は模範となる組合經營の視察を行ひ、或は成繭の共同販賣したる賣上代金の幾分を組合に預け入れるとか、又は信用組合或は報徳社等に保管して置いて、要求する丈け支出



する様にするとか、或は備荒貯金を勵行して、不時の天災又は養蠶凶作の用に充てるとか、實に立派な成績を擧げて居るものがある。

例へば京都府何鹿郡吉美村では、村中の養蠶家が悉く郡是製絲株式會社へ産繭の正量取引をして、其の得たる金は一時報徳社に預り、貯金を奨勵して居る、故に養蠶期間には總預金十萬圓に達し、二三月頃の預金最も少き時にても、三萬圓を下らない相である。又同郡白道路養蠶組合では桑苗を養成して組合員に配付して居る。

長崎縣南高井郡湯江村養蠶組合では六十四名の組合員があるが、こゝては桑園新設費の貸付をして居る、現在二十町歩の桑園を持ち、將來五十町歩設置の見込である、一反歩に對しては十圓貸付け、一戸三反歩以内で、初年は利益が得られぬから据置き、後二ヶ年々賦償還である。

大分縣下毛郡和田村田尻奉公組合では、縣より奨勵金として一年に二十圓づゝ交付せられた、其他からの収入があれば積みたてゝ置いたが明治四

十三年には百三十圓に達した、此の金に組合員から少しづゝ出しあふて、稚蠶用共同桑園を二反歩設けて組合の財産として居るが、各自の持分は畦できめて餘れば分ける、肥料としては人糞尿二十荷を買ふて二回に施し、尙葉を一戸から二十束づゝ持ち出す、耕耘は年四回行ふが各戸から一人づゝ出て仕事が早くしまへると引上げる、此の共同桑園が出来てから組合の基礎が強固になつたと云ふことである。

尙最も面白きは山口縣の模範養蠶部落である、同縣南部は水田であつて其の地に桑園設置することは、米作との關係上許されない、山間部に普及せしめやうと計畫せられたが、交通不便なる爲め繭販賣上大に困り、養蠶も永く續かなかつた爲め集團的に奨勵せられた、即ち二十人以上の人が五畝歩乃至一反歩づゝ桑園を作る組合で、各戸の距離は二十町以内に限られてある、この組合を作ると縣より模範部落と指定せられる、其の桑園一反歩の新設には縣より二十四補助金を交付せられ、其の桑園が開墾せられた



るものには五圓増ことになり、十年計畫で百ヶ所この様な組合を作ることになつて居り、縣は之を指導する爲めに専門の技術者を設置せられてあるかくの如く實際に組合其のものが堅實に發達し、進歩して活動したならば、養蠶家の訓練上偉大の効果がある

### 養蠶教師

町村役場又は町村農會或は養蠶組合に於て、設置せらるゝ養蠶教師は、常設たると季節たるとを問はず、養蠶家の訓練には、直接に大なる關係を有するものである、從來養蠶家は養蠶教師によりて訓練せられたる處もあり、又養蠶教師のみにてせらるゝと思はれた程の處もある、實際に於て技術又は經營上の改善は、養蠶教師に依らなければならぬ、夫れであるから養蠶が進む、進まざるは養蠶教師の責任となつたのも當然である、今日まで齟齬が取れないものがとれる様になり、凶作するものが殆んどない様にな

り、益々進む所以は、養蠶教師に負ふ處少くない、然し之等教師に依りて技術上の訓練には大に見るべきものがあつても「ハイカラ」とか新流行とか、兎に角淳朴なる農村の美風を破り、或は酒色に溺るゝ様なことがあり訓練せなければならぬものが、却て奢侈遊惰の風を誘起する様なことがありとすれば、利よりも害が大で、誠になげかはいしい事である、此等は自他充分に注意警戒し、技術經營上の改善と相俟て、社界的方面の改善に留意して、養蠶家訓練の中堅とならねばならぬ。

尙つけ加へて置きたいことは養蠶修得者である、蠶業に關する學校を卒業したとか、又は縣郡の蠶業又は農事講習所出身者は、一定年限の訓練を経た下士なり將校である、町村の養蠶家を引きたて、改良せしむべき、使命を帯びて居るのである、故に町村役場或は有志と提携共同して、以て町村蠶業の改良を圖ることに努めねばならぬ。



小學校

學校も亦養蠶家訓練の機關である、近時小學兒童に一蛾養蠶とか、五株栽桑とかを各家庭で行はして、成績を擧げて居る地方も少くない、例へば滋賀縣愛知郡に於ては、大正四年より御大典紀念事業として、郡長今井兼寛氏は、郡下十六校の兒童七千一百一十一名に、暑中休暇中各家庭に於て、四蛾育養蠶を課せられたが、兒童は趣味を以て養蠶に従事するのみでなく、父母兄弟も知らず知らずに養蠶の趣味を喚起し、且つ四蛾育の繭が、他の澤山飼育するものよりもよいことがあるので、養蠶技術上の改良を圖る上に於ても効果が著しいと云ふ、四蛾育によりてとれたる繭の内中上繭は學校で共同販賣をして、下繭と玉繭とは真綿に作つて、老いたる父母の衣服に入れて居るが、両親も非常に喜び永久に此の事業の繼續を希望して居り兒童業を卒へ農業に従事する場合には、汎く奨めて農村の爲に盡す考へ

を持つて居ると云ふことである、この兒童の美はしき事業に深く感激せる篤志の婦人は、兒童七千九百一十一名に對し、四萬本の桑苗を寄附せられたから、各兒童に五本を頒ち、大正五年二月十一日の佳節に栽植せられたが老朽桑園の中間に畫向暗さが如く繁茂せる魯桑種は即ちこの五本栽桑である。

五株栽桑四蛾養蠶に依つて、一粒の繭一寸の絲一葉の桑も粗末にしてはならぬことを教へ、且つ暑中休暇中は怠惰やすいものであるが、此の間に於て養蠶の趣味を助長し、勤勞の精神を養ふことは、洵に千金の價があると思ふ。

有力者

町村に於ける有力者も、又養蠶家の活模範を示してほしいものである、町村當局者其の他のものが、効蹟をあげて居るのは、一面に於て有力者の

有力者



後援あづかつて力がある、有力者が己の利益を犠牲にして、努力せられたる結果、養蠶家の訓練が出来て發達した地方は到る處にある、これは誠に喜ばしいが或る場合に稀には有力者の爲めに、折角他の努力も水泡となることもある、又養蠶の改善發達を圖るに何等つくす所なく、勸業のことは役場の仕事、農會の役と考へるものあるは遺憾である、故に有力者は、地方開發の中心となり、又養蠶家訓練について盡力を望む所以である。

以上の外各府縣廳及郡市役所は勿論其の他蠶業取締所原蠶種製造所各級農會産業組合等の官廳團體は、養蠶家の訓練指導機關である、亦地方に於ける製絲業者或は蠶種製造業者によつて指導啓發せられたる地方も少なくない。

### 第五章 結論

#### 百の理論より一の實行

以上述べたることは、養蠶家訓練の大要であるが、如何に養蠶家に良策があつても、名案が出て、又立派な手段が講ぜられても、之を實行する意志なければ、何の役にもたぬ、養蠶家訓練の必要なることは、三歳の童兒も尙能く之を辨ずる處である田夫野人も合點して居る、然るにもかゝらず、老爺老婆さんすら、今尙實地に行はざるものあるは、甚だ不思議である、蠶業は年々歳々進み行くに反して、養蠶する人が、次第に貧者になるとするれば、それは一に實行する精神がない爲である、少し生絲の値段の低いときには、養蠶は引合はぬとか、損であるとか、或は經營困難とか云ふ聲の、到る處で喧しきは、平素訓練の足らざるに基づくものである、或る人がカーネギー翁に向ひ、「富は如何にして得らるゝか」と問ふた處、翁答へて曰く、「朝疾くに起き夜に遅く寝ね、精々奮闘するにあり」と其の人曰く、「其の様なことは我も知れり」と其處でカーネギー翁の云ふに、「汝は知れるのみ、されど我は知りて實行したるが故に此の富を得たり」と



れは反覆して味ふべき名言である、養蠶について云へば、蠶病消毒薬は何  
 がよいと詮議するよりも、寧ろ蠶室蠶具を丁寧に洗滌して、日光に曝した  
 方が優つてある、數十挺の乾濕計を吊して、温濕度を論ずるよりも、寒い  
 朝はね起きて炭火を入れるとか、熱い日には日覆するとか、乾くときには  
 桑を粗く剉んで回数も多く與へるとか、濕めるときには除沙をして乾いた  
 粗糠か切葉を散布するとかした方が有効である、机上で窒素磷酸加里を論  
 ずるよりも、桑の肥料には鋤と鍬とがきゝめがある、千百の理論よりも、  
 一の實行が貴重である、或る人が乃木大將に、世の中を渡つて行く座右の  
 銘とすべきことを伺ひたいと云ふと、熱慮斷行であるとあつしやつたと云  
 ふ、物は熱慮して、善いと云ふことが解つたら斷行するがよし。

養蠶家の訓練 終

大正六年三月二十七日印刷  
 大正六年三月三十日發行

養蠶家の訓練奥附  
 正價金二十錢

著者 山田伊三五郎

東京市日本橋區箔屋町十四番地

發行兼  
 印刷者 竹澤章

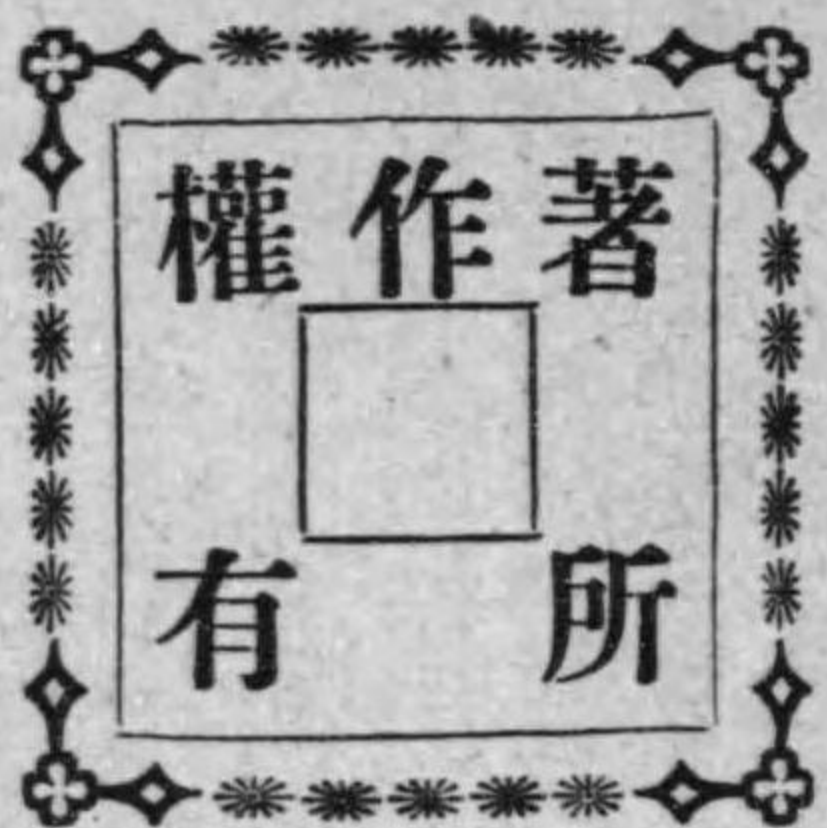
東京市日本橋區箔屋町十五番地

印刷所 丸山舎印刷部

東京市日本橋區箔屋町十四番地

發行所 丸山舎書籍部

電話本局二〇八五番  
 電話口座(東京)五八九二番





丸山舎發行圖書要目

Table listing various books and their authors, organized into sections like '農畜及經濟書の部' and '文學衛生修養書の部'. Each entry includes the book title, author, and price.

丸山舎發行圖書要目 東京市本橋區箱四十四番地 電話二八五九番



327  
948



終

